



「言葉の力」を中核とした学校づくり ①

「言葉の力」を中核に据えた理由

私たちは言葉によって、人類が蓄積してきた知識や知恵を獲得しています。言葉は**文化の中心**であり、知識や知恵なくして創造性や独自性を求めることは困難であることから、**創造性の根源**を成していることが分かります。

また、言葉はコミュニケーションの手段であるとともに、思考や感性を支えます。このことは、私たちが考えをめぐらしたり、物事を感じたりする際、必ず言葉（内言）を用いることで理解できます。言葉は**「知的活動」、「感性・情緒」、「コミュニケーション能力」の基盤**でもあります。

「これからの時代の国語力について」（平成16年、文化庁）には、言葉のもつ四つの力が示されています。**「考える力」、「感じる力」、「想像する力」、「表す力」**です。この四つの力を、児童・生徒はもとより教師も高め生かすことは、教育課題の解決につながります。



学校の教育活動及び経営・運営は多岐にわたり、実に多様です。その全てを包括し、質を左右するのが言葉であり、言葉のもつ四つの力です。このことは時代を経ても変わることはありません。いわば未来永劫、学校づくりに**「普遍」かつ「不変」**に関わるのが「言葉の力」です。

以上、「はむらの学校教育」の真ん中に、「言葉の力」を据えたゆえんです

正解はない

大リーガー 大谷翔平

正解はないと思うんですけど、人は正解を探しに行くんですよ。「これさえやっておけばいい」というのがあれば楽なんでしょうけど、たぶんそれは「ない」と思うので

出典：「大谷翔平は、こう考える」（桑原晃弥著 PHP文庫）

※ 教育界も、同様であると考えます。